

やったモン勝ち!

井上 剛

Inoue Go



海外で
タイヤキを
売るという
無謀でささやかな
ワーキングホリデー
ドリームズ

Do Fact!

筑摩書房

Fact! やったモン勝ち!

海外で
タイヤキを
売るといふ
無謀でささやかな
ワーキングホリデー
ドリームズ

井上 剛
Inoue Go

筑摩書房



2011年11月

井上 剛 (いのうえ・ごう)

1969年東京生まれ、関西育ち。早稲田大学法学部卒。セブン-イレブン・ジャパン勤務を経て、独立。自宅にて、都市型レンタサイクル、学習塾、経営コンサルタントなど「ひとりでもできる」ビジネスを立ち上げる。99年、ワーキングホリデーヴィザによりカナダ入国。同11月モントリオールにて、カナダで初めてのタイヤキ店をオープン。00年2月閉店（リセット）。8月帰国。01年5月、カナダでの経験を生かし、横浜市青葉区にてカフェ「セカンドカップ」開店。

井上 剛 やったモン勝ち！

海外でタイヤキを売るという無謀でささやかなワーキングホリデードリームズ



2002年3月10日 初版第1刷発行



発行者 菊池明郎
発行所 株式会社 筑摩書房
東京都台東区蔵前 2-5-3
郵便番号 111-8755
振替 00160-8-4123



印刷製本 中央精版印刷



© Inoue Go
Printed in Japan
ISBN4-480-81819-7 C0095



ご注文・お問い合わせ、および乱丁・落丁本の交換は下記宛へ
〒331-8507 さいたま市楠引町 2-604 筑摩書房サービスセンター
Tel 048-651-0053



I

言葉も不安なまま始まった初めての海外生活。住む・学ぶ・遊ぶ・食べるを満喫し、いよいよ店舗物件探し。予想はしていたもののやっぱり難航。とうとう契約をめぐってトラブル勃発。裁判沙汰に。

最高の部屋に住もう！……………	10
お金をかけなくても語学は身につく……………	23
ターニングポイント……………	34
常識vs真実……………	49
物件探しは連戦連敗……………	66
美人(?)助っ人は怖いもの知らず!?……………	77
コージーな店……………	87
契約トラブル、ついに裁判沙汰……………	97

II

セブナイレブンで身につけた仕事ビジネスの基本。
4年後「海外でタイヤキ」の夢を追って退社、ゼロから始める。
ひとりでもできる自信はついたものの、バリ出店の目処が立たないなか、突然ワーキングホリデーに出会う。

「セブナイレブン、いい気分」① 店勤務編……………	120
「セブナイレブン、いい気分」② 退社編……………	128

III

フーターローは蜜の味.....	136
ひとりでもできる.....	140
飛び立つ前の、修業の日々.....	148
ワーキングホリデーとの出会い.....	154

思いがけない出会いから店が決まり、いよいよ開店。
 思いつづければ、夢はきつとかなう。
 そして、最後のリセット。

ついに裁判、判決は——.....	162
I got a chance!.....	172
機材が届かない! 使えない!.....	193
1999. 11. 12 AM 11: 00.....	211
なんだか、楽しい.....	224
タイヤキ、モントリオールに行く.....	236
エピソード.....	247

やったモン勝ち！

海外でタイヤキを売るといふ無謀でささやかなワーキングホリデードリームズ

カバー・童謡イラストレーション

装幀

松本孝志
神田昇和

ブログ

「誰もがチャンスに片足をかけている。あとは残った片足を離す勇気があるかどうか」

僕が中学生のとき、ラジオ番組のエンディングにあるタレントが言っていた言葉だ。たぶん、当時アイドルだった彼もコピーライターの書いた文章を読んでいただけだったのだろうが、多感な少年だった僕の心は揺さぶられた。

「そのときは、左足を強く蹴りだそう!」

それから十数年経った、一九九九年の春から二〇〇〇年の春までの一年間、僕はカナダのモン트리オールで暮らしていた。ワーキングホリデー制度*を利用しての渡航だった。

目的はただひとつ。「タイヤキ屋を開店する」ため。この本はそのときの話だ。

このプランには、ふたつの「初めて」があった。

ひとつは、カナダで初めてのタイヤキ屋だったということ。

ひとつは、ワーキングホリデー史上、初めての店舗経営だったということ。

金なし（開店資金一〇万円くらい）、コネなし（初めての海外生活）、語学力なし（英会話もできない

うえ、モントリオールはフランス語圏)の僕が、どういいうきさつで海外でタイヤキ屋を開店しようと思ったのか、どのようにして開店できたのか、そんなことを書いてみた。

でも、これは海外で仕事をするためのノウハウ本でも、ワーホリのマニュアル本でもない。自由な発想や行動は、きつと「楽しい瞬間」をもたらしてくれるという一例を紹介したかっただけだ。サブタイトルに「ワーキングホリデードリムズ」という言葉を入れてはいるが、僕はこの本をワーキングホリデー希望者や学生だけを対象にして書いていない。むしろ二〇代の社会人を強く意識した。片足に力が入る瞬間が多い時期だからだ。

僕が今までに生きてきたなかで確信している「答え」がここにはある。

「ドゥー ファクト! (やったモン勝ち!)」

人間の可能性は無限大だ。でも、その可能性を自ら狭めている人が多いような気がする。僕たちが日々一喜一憂しているのは、たぶん人間に与えられた可能性のパーセントの中の話にすぎない。誰かに与えられたルールや常識、そういった枠組みの中だけで、自分の考えや行動を決めているからだ。与えられた枠組み、常識の中で生きていくには人生は短すぎるし、長すぎる。枠の外に出て、初めて自分の小ささを実感することができ、可能性が広がっていく。そして人生の長さを「適切だ」と心地よく感じるようになる。

僕は宝くじを買ったことがない。ギャンブルが嫌いなわけではない。当たりたくないからだ。

どうしてかって？

理由は単純。

「ストーリーがつまらなくなってしまっから」

*ワーキングホリデー制度…一八歳から三〇歳の男女を対象に、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど七か国との二国間協定によって、最長一年の滞在が認められるヴィザ。旅費を補う目的として、休暇に伴う就労が認められている。

モントリオール市街図

〈注〉 ④はメトロの駅



JUST FRAIS
SORBETS



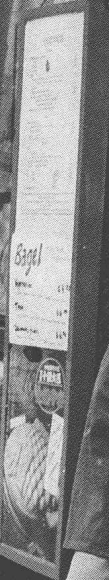
十勝大名

RESTAURANT
INDO-CHINA
BARAJA
BRASSE
ARRIERE

INDIENNE

SNACKTERIE

- Bagel et Jus Frais \$5.25
- Crêpes \$2.61
- Jus Frais \$2.61
- Sorbet \$2.61
- Sushi \$4.35
- Café, Thé



I



言葉も不安なまま始まった初めての海外生活。
住む・学ぶ・遊ぶ・食べるを満喫し、いよいよ店舗物件探し。
予想はしていたもののやっぱり難航。
とうとう契約をめぐるトラブル勃発。裁判沙汰に。

最高の部屋に住もう！

「いい加減にしてよ！ あなた難民なんでしょ！」

女管理人は声高に叫んだ。

この数日間にわたる僕の訪問に、日増しにイライラを募らせてきた彼女は、ついにキレたようだ。モントリオールに来てわずか一か月の僕は、通常のスピードでの会話は、まだほとんど聞き取ることができなかった。しかしこの「難民」という言葉だけは聞こえた。

一九九九年春先はコソボ紛争が国際的な関心事となっており、テレビやラジオでは、連日コソボ関連のニュースが取りざたされていた。その中で「難民」を意味する *réfugié*（リフュージ）という単語が頻繁に使われていたからだ。

おいおい、仮にもこの住人になるかもしれない僕にそういう言い方する？ 普通？

確かに今の僕の身なりは、日本的にはきれいとは言えないが、ここモントリオールでは人並み以上だ。部屋探しに來ただけの僕が、彼女にそこまで言われる所以^{ゆえん}はない。ふつつつと怒りが込み上げてきた。

彼女のラテン系で彫りの深い顔立ちは、一般的には美人の部類に入るのだろうが、彼女よりはる

か以前からキレていた僕には、彼女が白雪姫の継母、意地悪な魔女にしか見えていない。

五月になってからというもの、僕は新しい住まいを探して日々奔走していた。四月にモントリオールに来て以来、僕は語学学校から紹介されたカナディアンに住まいにホームステイしていた。しかし学校が終了する六月上旬にはそこを出なくてはならない。なんとかそれまでには次の住まいを決めなければならなかった。

基本的にモントリオール街には不動産屋というものが機能していない。どうして探すかというと、「VOIR」[「HOUR」]とった週一回発行される無料の情報誌(街中で入手できる)や新聞のアノンスコーナーで見つけるか、スーパーなどの掲示板に貼られている賃貸情報を頼りにするのである。それでも一番手っ取り早く、はずれない方法といえるのは、自分の住みたい地域に向き、直接そのアパートやマンションの管理人(通常コンシェルジュと呼ばれる)を当ってみることだ。アパートの外部に〈à louer〉とって表示が出ていれば、それは〈空室あります〉を意味する。ある規模以上のアパートの一階には Bureau de Location (レンタル・オフィス)と呼ばれる管理事務所が設置されており、そこには管理人が常駐している。

管理人といっても日本のそれとは明らかに異なるのだが……。

彼らは、日本のように清掃や郵便物の一時預かりをするだけでなく、入居時の審査から契約、さらには住人間のトラブルまで、一切合切を取り仕切る権限を与えられた、アパートのオーナー代行的な存在なのだ。当然、彼らは住人をお客としては考えていない。住まわせてあげるといった感